メディアリテラシー推進事業

～大学生スタッフによるドラマ制作体験～

松澤真木[†]

関西テレビでは、メディアリテラシー推進事業の一環として、公開授業「オープンスクール@カンターレ」を実施している。2013年12月の授業では「ドラマ制作」をテーマに、完成までの過程を解説した。題材にしたドラマには大学生6人がスタッフとして参加し、体験を通じて学んだ成果を聴衆に向けて発表した。本稿ではその模様を報告する。

キーワード：関西テレビ、メディアリテラシー、ML、ドラマ、オープンスクール、大学生

1. まえがき ～関西テレビ「オープンスクール@カンターレ」について～

関西テレビ放送（大阪市北区）では、メディアリテラシー推進活動の一環として「オープンスクール@カンターレ」と題する催事を毎年行っている（「カンターレ」とは関西テレビが「関テレ」と略して呼ばれることが多いため、そこからとった愛称である）。

本推進事業は2010年に始め、今回が第4回となる。本稿では2013年12月15日（日）に開催した同催事について報告する。

さて「メディアリテラシー」という用語－これは「メディアの情報を読み解く力」などと訳されている。

番組・ニュースなどがどのような組織構造のもとで、どのような過程を経て制作・放送されているのかを視聴者の皆様に説明し、また、「説明する」という行為を通じて送り手側も新たな学びを獲得していく、といった諸活動に各放送局でも継続的に取り組んでおり、これらが「メディアリテラシー推進活動」などと総称されている。

その中で、当社で行っているこの「オープンスクール」とはひと言で言えば一般に向けての公開授業で、そのほかには社員が小・中・高校の教室に行きレクチャを行う「出前授業」、高校の放送部を中心に生徒さんたちと共同で映像作品を作り上げていく「映像制作支援」などの活動がある。

「オープンスクール」の会場は社屋内の「なんでもアリーナ」で、事前の告知により希望した視聴者の皆様に来場いただいている（図1）。来場者は、下は小学生から上は年配の方と幅広く、いずれも「テレビが好き」、「テレビについ

図1 オープンスクール@カンターレ2013

てもっと知りたい」と、テレビへの興味・関心が強い人たちである。

当初は「番組などがどのように制作・放送されているのか」といったことをわかりやすく説明するという趣旨から、ごくオーソドックスなプログラムで構成していた。

第1回（2010年）を見ると、1時限目「メディア研究者、教職員、社員らによるパネルディスカッション」、2時限目「報道部による授業～ニュース番組ができるまで」、3時限目「制作部による授業～バラエティ番組のウラ側教えます!」…といった内容であった。

第2回（2011年）以降も、ドラマやスポーツ中継などの制作舞台裏、技術部門・美術部門の業務の解説などを、ひとコマ1時間程度に区切った授業で展開してきた。

このように続けてきたスタイルを大きく変えたのが2013年の第4回である。

「オープンスクール@カンターレ2013」では、1時限目、2時限目とも内容を一つのテーマに絞り、そのテーマは「ドラマ制作に学ぶ」とした。2時間ドラマ『Y・O・Uやまびこ音楽同好会』（2013年11月30日午後帯・関西地区ローカル放送）を題材に企画立案から準備、撮影、完成までの全

* 本稿の著作権は著者に帰属致します。

[†] 関西テレビ放送株式会社 CSR推進局 CSR推進部
"Report on Media Literacy Project; An experience in drama production for university students" by Maki Matsusawa (CSR Promotion Division, CSR Department, Kansai Telecasting Corporation, Osaka)

図2 ドラマ制作スタッフ

過程を詳説し、一日の公開授業全体を構成するというものである。これまでの「オープンスクール」と同じく、制作部はじめ各部署の社員スタッフ(図2)、またドラマ出演者の皆さんにも登壇いただいた。

今回の大きな特徴は6人の「大学生スタッフ」が授業を行う側に参加した点である。彼らは関西の各大学で学ぶ学生たちで、「オープンスクール」での登壇、発表を最終目標として、クランクイン前の段階からドラマスタッフの中に入り、準備作業に取組んだのちロケにも参加してもらい、ドラマ制作の現場を肌身で体験してもらった。

2. ドラマ制作の概要

2.1 ドラマ『Y・O・Uやまびこ音楽同好会』の概要

ドラマのあらすじ、出演者は次の通りである。

売れないロック歌手・河野勇作(桐谷健太)が友人の今野優作(鈴木亮平)に身代わりを頼まれ、今野の名前で高校のニセ教師に、日本海を望む京都府の田舎町にある『天橋立高校』に赴任、産休に入る教師・中山香奈(中村ゆり)の代理として3年の担任となる。

教師生活を始めた勇作の気がかりは生徒たちの覇気のなさだった。そこで勇作は全国の中学・高校の軽音楽部が参加するバンドコンテスト『スニーカーエイジ』に生徒らを出場させることに決め、周囲の反対の中、バンドのメンバ集めに奔走する。

変な教師、と生徒から思われていた勇作だが、次第に彼の熱意が伝わっていく。メンバが集まり始め、やがてバンドは12人の大所帯に。

『やまびこ音楽同好会』から頭文字をとった『Y・O・U』とバンド名も決まり懸命に練習を重ねた生徒らは、コンテスト出場のため大阪の会場に乗り込む。ところがこれから本番というそのとき、勇作がニセ教師であることが露見、勇作、そしてステージを控えた生徒らは窮地に立つ――

(番組の詳細は、関西テレビHPに記事を掲載している)

2.2 真夏に19日間のロケを

本作は1シーンをスタジオで収録した以外、すべてロケーションで撮影した。

ロケ地は主人公・河野勇作と12人の生徒たちの「地元」として京都府宮津市、彼らのひのき舞台となるコンテスト「スニーカーエイジ」の開催地として大阪市内とその近郊、この二つがメインとなった。

撮影期間は、2013年8月2日から9日を宮津市、間に兵庫県内の別の場所をはさみ、14日から20日までを大阪市とその周辺とし、連続して19日間。撮影は一部をA・Bカメラの2台、また約900人を収容するホールでの「スニーカーエ

イジ」のシーンでは複数のカメラを使用した、ほかは基本的に1台のカメラ(ワンカメ)で行った。

ロケは暑さのピークとなる時期となった。また、カットごとに撮影していくワンカメ体制には相応の時間が必要で、ほぼ連日早朝から立ちあがり、時には深夜までといった撮影スケジュールが続いた。

参加した大学生スタッフたちは事前に説明、打ち合わせ、各部署での準備などを経てきてはいるというものの、現場に入っただけで体を動かし、機敏に対応することは難しい。暑さ、長い作業時間、不慣れな動作、初めて一緒に仕事をする数十人のプロのスタッフ、出演者、関係者のいる環境の中で、彼らは「ドラマ制作体験」に入った。

2.3 最後までやり抜いた6人の大学生スタッフ

6人は今回の「制作体験」にあたり、それぞれ別々の部署に配置、おのおの参加する部署のチーフ級スタッフが彼らの主たる指導者となった。内訳は次の通り……

土井佑太さん(甲南大学法学部3回生)は制作部、日野郁花さん(奈良女子大学文学部2回生)は演出部、藤田直子さん(京都精華大学芸術学部2回生)は美術部、前田琴美さん(関西大学社会学部3回生)は撮影部、木村瑠花さん(関西大学社会学部3回生)は音声部、村谷理沙さん(同志社大学文化情報学部1回生)は照明部にそれぞれ所属。

彼らの「ドラマ制作体験」は文字通り「体験」で、スタッフらの仕事を傍らで「見学」して担当者から話を聞くというのではなく、それぞれが現場最前線で体を使って作業に取組み、スタッフの一員としてドラマ制作を経験した。

例えば、制作部に参加した土井さんは食事の調達・管理・分配や、ロケの候補地を自分の足で探しまわるなどの仕事、演出部の日野さんは俳優さんの目の前で「カチンコ」を打つ、リハーサルで「スタンドイン」(代役)を務め、美術部の藤田さんは撮影で実際に使用する造作物や装飾などを作成し、そして撮影部の前田さんはケーブルや撮影機材の運搬、準備などを任された。同様に、技術部門のほか二人も、それぞれアシスタント業務に取組むといった内容であった。

彼ら6人は、もともとドラマ制作、映像表現に興味を持っている、あるいは、将来の仕事として考えている人たちで、今回の「ドラマ制作体験」の呼びかけに応募し参加した皆さんである。つまり、モチベーションは一定程度高かったといえるが、先述の通り、今回の体験はそれでも彼らにはいろいろな面で過酷であろうと予想したが、途中で音を上げてしまうメンバもなく、全員が最後までこれを楽しみ、12月の「オープンスクール」での発表へとこぎつけることができた。

2.4 ロケ期間中にもリポートを

8月のロケ本番を前に、7月には各部署での準備作業もピークを迎えていく。この時期に、大学生スタッフの皆さんに一つをお願いをした。今回の「ドラマ制作体験」を運営するCSR推進部のスタッフに、メールで刻々リポートを送ってほしいというものである。

図3 ロケ準備に追われる土井佑太さん

図4 作業中の藤田直子さん

図5 カチンコを使いこなす日野都花さん

ドラマ、いやテレビの制作現場を初めて体験する彼らには、毎日見聞することが知らなかったことばかりであり、強い驚きや大きな発見もあるに違いないと期待した。ただし、毎日々々「新しい体験」を積み重ねていると、以前の経験は記憶の中で次第に「上書き」されていってしまう。そこで系統的に整理するのはあとにして、まずは感じたこと、知ったことを逐次書きとめ、スタッフらと共有し互いに深めていければと考え、とった方策であった。

ロケの最中には1分でもあれば休みたい、眠りたいといった状況もあったに違いないが、こうして「文字」を残しておくことは、最終的に「オープンスクール」の場で発表するための「ことば」を各自が積み上げていくうえで役に立ったのではないと思う。

8月20日深夜、大阪近郊の高槻市でロケは終了した。最後のカットに監督のオーケーが出るのをモニターで確認した。6人の学生たちは花束を抱えて主演の桐谷健太さんの所へいき、何人かは目に涙を浮かべていた。ドラマの現場は「同じ釜の飯を食う」という表現があてはまる、いまや数少ない職場でもある。彼らの涙も、結局のところ、そうしたことを体験したゆえの感動だったのだらうと思う。

3. オープンスクール@カンテレーの報告

3.1 クランクアップから「オープンスクール」本番へ

ロケ終了後「オープンスクール」本番までは4ヵ月の時間がある。6人には何度か集合してもらい、ミーティングを重ね発表する内容を固めていった。他者に向かって伝えるエッセンスを無定形な思いや知見の総体から抽出し、収斂させていく作業であった。

そして12月15日「オープンスクール@カンテレー2013」当日－会場は超満員の盛況となった。

まず午前10時30分からは「オープニング」。続いてドラマ『Y・O・Uやまびこ音楽同好会』の「大スクリーン上映会」を行った。午後からの公開授業をより深くご理解いただくため、来場の皆さんには放送をご覧いただくか、この上映会に参加いただくかをお勧めした。

そして午後、いよいよ公開授業。1時限目は13時からの70分、タイトルを「ドラマ演出のすべて、語ります!」とし、本作の監督を務めた制作部・木村弥寿彦と助監督の話、続いて制作部・美術部・演出部の順に進めた。

2時限目は「これがドラマ撮影現場だ!」として14時30分に開始。今度は撮影部・音声部・照明部の制作技術各部門による授業で、クランクイン後のプロセスを中心に構成、加えてバンド「Y・O・U」を組んだ生徒役の皆さんによる「演技」についての話、最後はこのバンドによるミニライブをフィナーレとして全体を締めくくった。

3.2 1時限目(制作部、美術部、演出部)

学生スタッフの発表、まずトップバッターは制作部に参加した甲南大学の土井佑太さん(図3)。今回の大学生スタッフで唯一の男性である。

「制作部の担当が男の僕でよかった」というのが彼の第一声だった。理由は土井さんが発表した「制作部の仕事一覧」で一目瞭然、ロケ地の選定/撮影の許可をもらう/スケジュールの作成、変更/駐車場所の確保、車輛の誘導/電力の確認/食料、飲み物、医薬品など、スタッフ・出演者の身の回りで必要なものすべての手配/「人止め」、「車止め」/あと片づけ、つぎの現場への移動の段取り…などなど、あまりの大量さに、会場からはため息が。

制作部とはこのように裏方中の裏方、撮影を順調に進めていくため、あらゆる「段取りごと」を一手に引き受ける部署なのである。体力、持久力、忍耐強さが求められ、土井さんが「男の僕でよかった」と語るゆえんである。

「制作部と聞いて、何か華やかな仕事を想像していた。ところがいざ参加してみると…」何でも先んじて準備し、あと処理も任される。誰よりも早く起き、誰よりも遅く寝る毎日の連続。皆のテンションを上げるため、食事メニューの工夫も欠かせない。飽きがこないように、喜んでもらえるように…でも、自分たちの食事はいつも移動中のロケ車の中、それもおにぎりばかり。

しかし、もともと明るい性格の土井さんは、最後までやりとげた。彼に教えた制作部のスタッフたちからは、「映像の中では何一つ報われることはないけれど、俺たちがいるから皆が100倍の力を出せる」、「ここで必要なのは“愛”だ。それしかない」といったいくつかの「キーフレーズ」をもらったという。懸命に取り組み、土井さん、現場では皆に大人気となった。

続いて発表したのは、美術部に参加した京都精華大学の藤田直子さん(図4)。まず藤田さんに仕事を教えた美術部の担当者が「ドラマ美術」を概説する。ドラマとはフィク

図6 撮影準備中の前田琴美さん

図7 音声機器確認中の木村瑠花さん(右)

図8 使用したマイクの紹介

ション、虚構の世界。ロケーションはあちこちにある現実の場所をお借りして行すが、そうした場所にかに“虚構の中のリアルさ”を作り込んでいくかがドラマの美術。

美術部は虚構の中のリアルさを表現するための加工をロケ場所のすみからすみまで施す。そのためにトラックで持ち込む物量は半端ではない。わかりやすい例をいくつか映像でお見せした。例えば「宮津の小料理屋」というシーン。実は当社からも歩いて行けるほど近くの大阪市内のお店をお借りして収録した。普段ならお酒も料理も大阪らしいものが並ぶお店であるが、美術部はとことんこれを「改造」した。お酒のラベルは宮津、あるいは京都北部の地名を冠したものにことごとく変えた。料理もこの地方ならではの食材を使ったものに。また玄関先には「丹後」(京都北部の旧国名)と墨書した大きな提灯、俳優さんらの背景には、当地の民謡「宮津節」の歌詞を染め抜いた手拭いをあしらうなど。大小の画角でシーンを切り取っていくドラマ映像では、美術装飾は限りなく徹底的に施してはじめて説得力を持つのである。

藤田さんがこの仕事を通して知ったのは、ドラマ美術の現場ではあらゆる事物についての膨大な知識が要求される、ということ。世の中のものごとのありようにはそれぞれ固有の決まりごと、法則、慣習、しきたりなどが思いのほかつきまとう。そして本当の「リアル」を作るにはそれらに通暁している必要がある。現場では気さくに接してくれた美術スタッフたちの頭の中には、じつは大量の知識が詰まっているという意義深い発見であった。

1時限目のラストバッターは、演出部に参加した奈良女子大学の日野郁花さん(図5)。まず映像で日野さんの仕事ぶりをご覧いただいた。前にも書いたカチンコ、そしてリハーサルでのスタンドイン、演出、撮影、音声、照明など全セクションがこのリハーサルで本番の動きをつかんでいくため、重要で責任の重い仕事である。アマチュアでありながら日野さんは最前線の役割を託された。それらを最初に映像でご覧いただいたのには理由があり、演出部の仕事の意味や目的につながるものだからであった。「スタンドインは“堂々と”やるのが大事。私がそうすることで、いい感じの笑いが周囲に起きることに気がついた」最初は気おくれもし、堂々となどできなかったが、ある時そうすることの大きな効用に日野さんは気づいたという。いい空気が

あってこそ当事者間のコミュニケーションは円滑になり、仕事全体が順調に進んでいく。監督と各部署のスタッフ、出演者との間を朝から晩まで行ったり来たりし、配慮を重ねながら、撮影が意図の通り進行していくことに責任を負う助監督ら演出部のスタッフ、その仕事に要求される「空気」を、日野さんは場数を踏む中で体得していった。

3.3 2時限目(撮影部、音声部、照明部)

2時限目はまず生徒役の皆さんによる「演技」についての話から入り、出演が決まったのち彼らがどうやって役作りに取組んでいったか、苦労談や訓練のエピソードなどが披露された。そのあと続いて、撮影・音声・照明各部からの発表となった。技術部門も、来場者に伝えたい、知ってもらいたい内容がいくつもあり、ここを見てくれ、というポイントを深めれば深めるほど、話のつきない世界である。その一方で、来場者によりわかりやすく説明していくには何から始めて、どう流れを構成していけばよいか。撮影部は関西大学の前田琴美さんである(図6)。まずは紹介の映像で、小柄な前田さんがカメラケーブルを扱い、大きな機材を運ぶ。何度も繰り返す積み下ろし、設置、撮影、撤収、移動。誰もが驚く機材の量。何の目的でどう使われていくのか…。前田さんには次に「カット割り」の話へと進めてもらった。来場者の手もとにもカット割りの入った台本のサンプルをお配りし、スタッフのコンセンサスのもとになるそれを説明する。「BS」、「GS」、「L2S」などと、多くの方々には意味不明の記号であろうこれらを、映像も映し出しながら解説してもらった(ちなみに「BS」は「バーストショット」：胸のあたりまでのショット、「GS」は「グループショット」：被写体のグループのショット、「L2S」は「ルーズツーショット」：周囲も入れたルーズなツーショットである。映像作品は基本的に一つ一つのショットを編集＝モンタージュして構成することが前提であるため、こうしたショットのサイズの理解は制作者に欠かせないものとなる)。

次は撮影機材の話である。クレーン、ステディカム、レールによる収録風景、そして完成したドラマの本編映像と続け、それぞれの特性を解説した。さらに、俳優さんのリハーサルでカット割りをすべて変更、ワンカットで一気に撮り上げた現場のようすをご覧いただいた。教師を演じる桐谷健太さんが怒りを表現するシーンである。桐谷さん

は予定の「立ち」芝居でなく、どこまでも歩いて行く形で演じた。そこで撮影部は急遽ステディカムを用意しこれに対応した、というところを来場者にご覧いただき、しかしながら、さまざまな機材は最良の映像を求めるための「引き出し」、「ツール」でしかない、といった話へと展開させていった。

続いて音声部のパートでは、会場を巻き込んでの動きも入れてみた。参加したのは関西大学、木村瑠花さん(図7)である。「動き」の部分以外は順を追う形で解説していった。まず今回使用したマイクをいくつか映像で紹介した。ピンマイク、足もとの置きマイク、絶妙な場所への仕込みマイク。そして見るからに圧巻と思われたのが、長さ5mくらいにブームを延長したガンマイクによる収録である。ブームを長時間ホールドし、若い音声マンもさすがにその重さが顔に出ていた。またノイズ対策の話、収録した音声を現場でミキシングする様子や、俳優さんのセリフに合わせてすばやく繊細に動くミキサーの指先のアップ映像には、会場からも驚きの反応があった。そして会場での「動き」を入れた部分。目に見えない音声の仕事を説明するため、マイクの現物をたくさんご覧いただくことにした。バンドの音楽部分の収録は別として、芝居の部分に使用したマイク8種類全部をワゴンで持ち込み紹介した(図8)。そのなかに入れておいたのが、先ほど映像でも登場したガンマイク。会場でもブームを長く伸ばしてみた。ホールの屋内空間でやってみたのでこれがいわゆる「面白い画づら」となり、会場は沸いた。さらにお客様にも長いブームを高く支えてもらった。当然ながら「じつに重い」との反応。音声部の仕事の一端を実感的にお伝えすることができたのではと思う。

そして最後は照明部、同志社大学の村谷理沙さん(図9)である。ドラマ照明とはすなわち映像表現そのものであり、それをそのままストレートに説明する展開とした。

『Y・O・Uやまびこ音楽同好会』は、高校のバンド活動をめぐって、先生、生徒たちが織り成していく、基本的には笑いや楽しさに満ちた物語であるが、陰影を伴ったシーンも数多く盛り込まれている。こうしたシーンを中心に、会場ではドラマの本編映像をまずご覧いただき、続いてポイントとなるカットを静止画で投影しながら、照明が表現した登場人物の心理、シーンに求めたトーンなどを解説していった。

また、タクシー車内の会話シーンをスタジオで撮影した際、流れていく街の明かりを表現するため「スピナー」と呼ばれる回転式の大型機材を使用したこと、人物の顔に反映する対向車のヘッドライトを手持ち照明のオペレートで表現したことなどを、映像とともに説明した(図10)。大がかりな機材と手持ち照明という「アナログ的」な手法とを同じシーンで使うドラマ照明の方法の多様さ、面白さを会場の皆様にも理解いただけたと思う。

発表した村谷さんも「最初、照明とは現場を明るくする仕事、というくらいのとらえ方だったが、本当はそれがい

図9 照明準備中の村谷理沙さん(右)

図10 タクシー車内会話シーンのスタジオ撮影

くつもの方法を使って多様な映像表現を重ねていく仕事なのだと理解できるようになった」と。来場者にも共感いただきやすい視点で説明してもらった。

4. むすび

以上、本稿では普段一般にお伝えすることのないドラマ制作の現場の様相を大学生スタッフの体験発表を通して知っていただく、という一つの試みについてダイジェストした。メディアリテラシーには、スタッフらも送り手の側もまた体験を通じて「学び」を獲得していくという側面がある。今回携わったスタッフからも「自らの仕事を客観的に振り返る機会となった」など、成果を実感できる反応が寄せられた。

ただし、各放送局が取り組むメディアリテラシー活動はその手法において実に多種多様であり、本稿はあくまでその一例を挙げたにすぎない。各位のご参考に多少でも資することができれば幸いである。

(2013年12月24日受付)

松澤 真木 1981年、関西テレビ放送(株)入社。営業局、制作局、報道局、ライツ開発局に勤務。2012年から、同社CSR推進局CSR推進部部長。